

科学女子の進む道—50年前も今も

藤原亜紀子



卒業後の就職

私が大学を卒業したのは今から50年前、1964年のことです。当時、女性は就職において男性と同じ機会は与えられないという今では信じられない状況でした。たとえば、大学に届く募集に応募しても、「うちは男子学生だけです。女子学生の採用は考えていません。」と無下に断られるだけで、直接企業の人事部に「なぜ女子学生は採用しないのか、自分は男子学生と同じかそれ以上の仕事をします。」と談判しても担当者からは、「女子学生は各事業所採用ですから事業所で相談してください。」や「貴女が男性だったらすぐにでも採用したいのですがね。」と追い返される始末でした。

卒業して就職先を探すにも自分が何をやりたいとか、学んだことを生かしたいなどを考える余地はなく、ただどこか採用してくれるところはないか一人で動き回るだけでした。それでも幸運に、ある乳業会社の研究所長の裁断で研究職採用が実現しました。しかし、入社してみると待遇には大きな男女差を感じ憤慨することが多く、女性だということだけでこのように扱われることに虚しさを感じました。そこで、大学時代の指導教授に大学でもう少し勉強をしたいと相談したところ、それなら企業から出向で大学の研究室に来ないかと誘っていただきました。この時、先生自ら研究所長に話をしてくださいましたが、研究所長の返事は「男性研究員なら喜んで出向させたいですが、女性はそういうわけにはいきません。」とのことでした。ここで迷うことなく退社して大学に戻り、博士課程5年間をバイオの研究室で過ごしました。

最初にそのような経験をしましたので、その後の職業選択には、男女雇用均等を実践している欧米外資系を志向するようになりました。

外資企業での研究生活

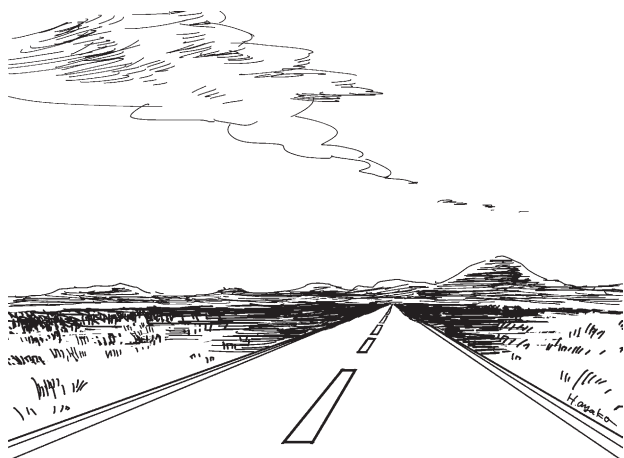
博士号を取得後に選んだのがスイスの製薬企業「 Hoffman-La Roche」の日本研究所です。ロシュはちよ

うど日本に研究所を開設するところで、初代所長となるスイス人との面接で採用が決まりました。最初の仕事は研究室のレイアウト、必要機器の選択などに加えて研究室に参加してもらう人の採用にも関与しました。研究活動を開始し、数年後にはスイス本社および米国支社の研究グループとの研究協力体制ができて人的な交流も盛んになってグローバルな研究環境が整うまでになりました。お互いの技術やノウハウを共有して研究プロジェクトに取り組み、会社に貢献ができました。この時期、若い仲間たちと一緒に私が望んでいた研究活動をすることができることに生きがいを感じていましたので、そのまま15年余りをこの環境で過ごしました。

ただ、研究以外に目を向けると、外資系企業と言ってもほとんどの役職者は日本人男性で、日本企業とまったく変わらない状況に気づきました。その頃私は、結婚して二人の子供を保育園に預けて悪戦苦闘しながら生活をしましたが、「女性は外で働くより家にいて子供を育てることに専念すべきだ」と言う考えの男性もいました。エレベーターで会うと嫌味を言われ、お小言を聞かされるのが常でした。今ならハラスメントになるのだと思いますが、当時はそれに耐え忍ぶしかありませんでした。昇進やボーナスの査定時にも、「貴女は女性だから」や「貴女はご主人もボーナスをもらっているから」と当然のように差別待遇され、やはりこれ以上頑張っても限界があると悟りました。外資系企業といえども日本支社には落とし穴がありました。それが次の仕事に移るきっかけとなったのです。

転 職

1989年、縁あってSRIインターナショナルという米国西部にある研究所の東京オフィスで、受託する研究やコンサルティング業務の渉外（主に、日本企業とSRI本部の研究者との橋渡し役）を担当することになりました。この頃はまさに、バイオ技術が日本でも注目され始め、異業種からの参入が活発になり、日本企業からの研究受託が増えてきた時です。私の仕事は、本部研究ス



タッフの研究内容を理解して日本企業に紹介することから始まります。技術を詳細まで議論することが多く、それまでのバイオの知識を活用でき、興味を持てできる仕事でした。上司も仕事仲間もほとんどが本部のアメリカ人でしたので、今までの職場で感じてきた男女差別のストレスからは解放されました。

仕事に付随する楽しみもありました。研究者との相談のためや、日本企業の研究者に同行してSRI本部に行くこともしばしばありましたが、週末にはレンタカーで西海岸のドライブを楽しみ、スタンフォード大学構内でのんびりと過ごすことができました。このころは仕事が自分の楽しみと融合していました。日本に残してきている子供たちのことは心配でしたが、広い海、広い荒野、延々と続く山々を眺めていると、日本で子育てに四苦八苦し、言うことを聞かない子供に腹を立てて叱ったりしていたことも馬鹿らしく思うことが多かったです。

再びの転職

外資企業を対象にして転職を斡旋するヘッドハンティング会社が日本で広がり始めていた1992年、ヘッドハンターの紹介でジョンソン・エンド・ジョンソンに転職しました。「ベンチャー投資」をすることが役目であるJ&J Development Corporationの日本部署で、当時本国から派遣されていた責任者が帰国するその後任ということでの採用でした。ジョンソン・エンド・ジョンソンは医薬品、診断薬、医療機器および消費者ヘルスケア製品など広い範囲のビジネスを各部門の分散経営でやっていました。製造・サービスの企業でありながら、将来のビジネス発展の為に外部の技術やビジネスチャンスを発掘して投資をすることが私の所属する部署の役割で、本社

CEO直属の機構でした。当時医療分野で未解決な疾患としてアルツハイマー病があり、日本の研究者が発見した脳波による早期認知機能障害を見つけるための先端技術に目をつけて投資を提案しました。しかし、病気を発見できても治療法がないので企業として無責任になると言う理由で残念ながら投資を断念することになりました。研究開発とビジネスの接点にいて常に先端の技術に触れることができました。

ジョンソン・エンド・ジョンソンは世界60か国におよそ200社の子会社を抱える大企業でしたので、毎年開かれる同僚との会議や管理者教育などの機会には国籍の異なる人々と会って議論し、情報交換ができましたので、広い視野での思考が身につきました。会議で日本のビジネス習慣の講演をすることもあり、改めて日本の特質や日本人の長所・短所を認識するようにもなりました。当時からジョンソン・エンド・ジョンソンでは女性およびマイノリティーの管理職登用には力を入れていました。さらに会社創業者が70年前の1943年、会社を公開するときに企業の社会的貢献と責任を宣言して提案したCredo（クレド）と呼ぶ企業精神を世界中の全社員に徹底しているのも特徴です。社会だけでなく、株主、顧客、従業員に対しての企業の責任を宣言しています。2年ごとに全社員にCredo精神が守られているかのアンケートを実施して調査しているほどです。このような企業では、性別、人種別などはまったく関係なく一人ひとりを評価するのです。私の職歴のなかで最後の10年余りをこのような環境で仕事できたことは幸せでした。また、この時期には自分が女性であってよかったと思うことも多くなりました。女性だから名前をよく覚えられ、仕事もスムーズに進み、心地よいもてなしを受けることもあったのだと思います。

定年後

私の定年までの40年間の前半は男女差別との戦いでしたが、後半はそのような環境から解放されて思う存分に仕事できたと思います。考えてみると、前半は日本企業と日本社会のなかでの仕事で、後半は米国人を上司に持ち、グローバル環境で働けたことが大きな違いだと思います。

定年退職してからは第二の人生として何か自分が納得できる生き方、働き方を模索しました。そのような時にオーストラリアの研究者グループにより開発された軽度認知機能障害を早期に発見する技術に巡り合いました。超高齢化社会に向かっている日本には必要な技術と考

え、迷うことなくベンチャーを創業してライセンスを取得しました。日本国民の健康寿命を少しでも長くすることへの貢献は私自身の使命と捉え、やりがいを感じています。認知症については社会的な理解も少しずつ深まってきましたが、まだまだ解明されていないことが多く、複雑な脳の仕組みに驚かされることが多い毎日です。アルツハイマー病は他の疾患と同じように治療可能な疾患ではなく、むしろ発症を予防することへの取組みがより重要ではないかと強く感じています。少しでも社会に役立ちたいと願いながら毎日を送っています。

最後に

今、女性が働く環境が改善され、私が味わってきた男女差別との戦いにエネルギーや時間を費やす必要もな

く、保育園もまだ不十分とは言え整備されてきたことに心強く、嬉しく思います。それと同時に、若い女性たちが羨ましくも感じます。ワークライフバランスという考え方も浸透し、個人が自分の環境や生活に適した仕事、職場を選択できるようになりました。最近は国がいろいろな形でキャリアを支援する施策を講じ、働く女性を後押しするようになり、昔と比べたら比較にならないような環境の中で若い人たちが性別を意識しないで存分に仕事に興味と生きがいを見つけて人生を歩んでほしいと願っています。これまでの人生で、文系に進んでいたら良かったと感じたこともありましたが、ここまで歩いてきて技術系で学び経験を重ねたことに感謝し、技術系だからこそ味わえた喜びを後輩にも伝えたいと思います。



ジョンソン・エンド・ジョンソン（J&J）時代の管理者研修：いろいろな国からの出席者たちと



J&J：技術調査団が来日した時の夜の集い〈おもてなし〉

＜略歴＞ 1972年 東京大学農学系大学院（微生物・発酵学専攻）博士課程修了（農学博士）/日本ロシュ（株）リサーチセンター応用微生物学部門（課長・部長・部門長歴任）/藤原科学・技術渉外事務所/SRIインターナショナル/ジョンソン・エンド・ジョンソンデベロップメントコーポレーション日本代表/AFベンチャーズ（有）取締役社長を経て2004年11月株式会社ヘルス・ソリューション設立（代表取締役）/1997年～1998年 京都大学医療工学研究所客員教授

＜趣味＞音楽、ピアノ演奏、編み物、園芸